巻頭の辭

汪洮銘政府は南京還都として生れ日滿支一體の體制一應整つたが物資の不足人的要素の不足は新東西の建設がある程度完了するまでは目下の狀態が繼續するものと覺悟しなければならない。

物資は勞働によつて造り出されるからその不足の補充は勞働力を必要とし歸する所人的要素の問題になる。壯者は皆戰の場に立ち出でた日本の農村では翁と童はその生業に精進して例年に劣らぬ生産をやつてゐることは實に敬服に値することで餘剩勞力の活用の見地から又さうあらねばならぬのである。

滿洲の餘剩勞力特に婦人の活用については大いに考慮しなければならぬ、滿洲に於ても婦人が積極的に働いてくれるなら支那より輸入する勞働者の數を相當減ずる事が出來ると思ふ。

人的要素の不足は、急激なる人口の增加が不可能であるから分掛を多くして一定の仕事量を消化して行くより外に方法はあまい。特に滿洲の建設に從事して居る吾人は一人で正に三人分働かざればこの難關突破は先づむづかしいと思はれる。

一方技術の幹部は數に於て頗る少なく後輩に手を取つて敎へ得る時間を中々見出し得ない狀態である。ために若く自ら勵み、自ら習はざる者は凡そ老いたる無能者に成り果てる懼多分にあり。

滿洲に於ける工事費の大きい事は建設の途上極めて當然の事であるが時間と人的不足より熟慮研究の暇なく夢中に形式的に完了せしむる憾なしとせず。斯の如きを以て年を重ねなば眞の技術者が後を絕つに至るであらう。

以上に對處するには常に撓まざる勉强と骨惜しみせずにまめに、立ち廻る事が何より必要である。人體は一種の機械であるよく運轉すれば病氣する事なしに驚くばかりの仕事が出來るに相違ない。

今や陽春の四月、これから全滿一齊に工事施行の幕が開かれんとする時吾人の心構へは果して如何、再考三考を希望してやまず

（康七・四・二二　照井）